

作品と画家の人間性の関係について

吉岡 正人*



* 埼玉大学教育学部美術教育講座

果たして美術を行うことは人間性を陶冶するのだろうか？

確かに多くの画家や彫刻家がすべからく人格者である訳でも知的な人間である訳でもない。むしろ、一般的に信じられている芸術家像は、協調性の無い、変わり者で、社会性が無く、自堕落で退廃的で、若くして自滅的に死んでいくような人間だ。例えばモジリアニだ。彼はイタリア生まれのユダヤ人で、素晴らしい美男子であった。フィレンツェの美術学校で学んだ後、21歳でパリに出る。パリに出てからのモジリアニの放蕩な生活はいったいどうしたことだろう。彼はパリに出る前に、彼の人生を貫くと思わせる考えを文章にしている。内容を要約すると「芸術家は一般人とは違った人間であること。芸術家の義務は夢を保ち続けること。そのためには、道徳の規範を超越し創造力を生み出す為に戦わなければならないこと……」ということだろうか。彼はその言葉を実行するように精神も肉体も切り刻むような生活をするようになる。彼は多くの女性と浮名を流し、酒や麻薬に溺れ、諍いの種を蒔き、ボロボロになるまで描き続け36歳で夭折している。多くの女性からうっとりする程の悪党と言われたモジリアニは、そのデカダンな生き方に於いて実に魅力的である。しかし、これは人間性の陶冶とは全く正反対の、人間性の崩壊にベクトルの向いた生き方ではないだろうか。ゴッホはどうだろう。一見、モジリアニとの類似性を感じさせる夭逝の画家だが、内容的には正反対だ。彼は元々牧師を目指すような敬虔なクリスチャンで退廃とか自堕落とは無縁である。彼はむしろ全く妥協の無い理想主義者で、その妥協の無さが、理想と現実の間で彼の精神を破壊していったと考えるべきだろう。彼の人生を知るにつけ例えば彼の作品をいかに愛していても、彼と一緒に暮らすのは勘弁して欲しいと思う。彼は絵を描けば描くほど純化しているのかも知れないが、やはり人間性の陶冶とは違うように思う。少なくとも彼等は社会性に乏しく少なくとも人格者ではない。では、そ

んな彼等の作品が何故、人の心を打つのだろうか。

私は以下の2つのことをその理由と考えている。ひとつはある種の極限状態が画家から迷いを取り去るのではないかということだ。何かをなそうとするとき人は迷うものだ。迷いが人間をより深い思考に導くのだが、一方で迷いは人間が全力を出すためにはブレーキになるものだ。迷いをとることは一気に全ての能力を解放する。自らを極限に追い込み、迷いを取り去ることはポテンシャルを全開にする一つの方法かもしれない。彼等の爆発的な完全燃焼的制作は普通の精神状態では得られないものだと思う。

もう一つは、作品は作者を超越するということだ。最初にも書いたのだが画家は常に人格や知性が優れている訳ではない。しかし、そのような人間の作品が多くの人々に何かを語りかけ、時には人を救い、時には勇気づけ、時には道を示す。何故だろう。私も絵を描くものとして思うのだが、作品は時に画家の存在を越えるのだ。例えば私の作品が全てに於いて私より小さいものであったら、その存在は本当にとるに足らないものだと思う。しかし、時に私の作品は私を超え、私に語りかけ、私を救い、私を勇気づけ、そして道を示すのだ。私はできる限り作品を描くとき覚醒し、全てをコントロールしながら理論的に作品を作りあげたいと思っている。しかし、そう思えば思うほど、その理論からはみ出して筆が一人歩きする部分がでてくる。そしてその時に作品は私を超えるのだ。

私は美術を行うことが人間性を陶冶するかどうかはわからない。しかし、優れた画家の作品はその画家の人間性とは関係なく鑑賞者の人間性に働きかける力を持っていると信じている。そして、そのことこそが美術作品の存在意義だと思う。

(2007年9月28日提出)

(2007年10月19日受理)



「朝の画家」 116.7×90.9 cm テンペラ・油彩・キャンバス 2007年